

## 超越論的システム論の可能性

永井俊哉

本報告論文では、第一節でまず『社会システム論』<sup>(1)</sup>を中心に、ルーマンのシステム論を検討しつつ、△妥当性△についての問題を提起し、第二節では、この問題を権力論的に捉え直し、第三節では、超越論的システム論の可能性を探る。なおルーマンは、哲学者の間では必ずしも周知の人物ではないので、解説的論述が多くなることをあらかじめお断りしたい。

## 一 ルーマンのシステム論

まずシステムとは何か、その概念規定から始めなければならぬが、この概念と紛らわしい構造概念との区別から始めることにしよう。構造とは、諸要素が一定の関係で結び付けられているところの秩序であるが、他方「システムは限界を持っている。これがシステム概念を構造概念から区別する」<sup>(52)</sup>。限界がシステムと環境を区別

する。とはいえシステムと環境は相互置換的ではない。例えば、我々心的システムは我々の外部たる環境を認識、することができるところから明らかのように、「システムと環境の差異はシステムの内部で反復」<sup>(53)</sup>される。「環境はシステムによって、そしてシステムとの相関においてのみその統一性を得る。環境は環境のほうで、越えることのできる限界 Grenze によってではなく、開かれた地平 Horizont によって限界付けられる。それゆえ環境自体はシステムではない」<sup>(56)</sup>。もちろんあるシステムが他のシステムに対して環境になるということはありうる。しかし「ひととは、あるシステムの環境とこのシステムの環境における諸システムを区別しなければならない」<sup>(36-37)</sup>のである。

諸要素が一定の関係で結び付けられてある可能的構造／事態が形成される<sup>(2)</sup>が、その数を複雑性と呼ぶ。「あ

るシステムにおいて、またはそのシステムの環境としてのあるシステムにとって合成されなければならない要素の数の増大に伴って、要素間の関係付けがもはやそれ以上は不可能となる限界にひとはただちに突き当たる(16)。  
かくして有限なシステムは複数の可能的諸事態の中から選択をしなければならぬが、これをルーマンは術語的に複雑性の縮減と呼ぶ。ここで我々は首をかしげざるをえない。確かに要素間の関係の数は、要素の数  $n$  に対して(重複を許して  $r$  個並べるとする)  $n^r$  であり、要素の数の無限な増大に伴って法外に膨大な天文学的数字になる。我々は、このように複雑な世界を単純化しなければ、つまり一定の解釈を行わなければどうにも行為することはできないだろう。重要で relevant な事態が選ばれなければならない。しかし我々にもっとシリアスに選択を強いるのは、矛盾する関係にある選択肢(その数はたったの二つである!)ではないのだろうか。同一主語に対する矛盾する二つの述語のうち一つを選ばなければならないのは、数量的技術的理由によるのではなくて、論理的理由による。ルーマンがこの点を見逃しているのは、彼が初めから妥当性  $\parallel$  超越論的主体性の問題を放棄しているからだと思う。

今の問題提起が、本稿の主題なのだが、もう少しルー

マンの祖述を続けることにしよう。「 $\nabla$ 組織化された複雑性 $\nabla$ 」はシステムが形成されることによって成立しよう。というのも、 $\nabla$ 組織化された複雑性 $\nabla$ とは要素間の選択されるべき諸関係の複雑性以外の何物でもないからである(17)(ibid.)。それゆえ複雑性とは選択の強制であり、

「 $\nabla$  auch anders möglich sein $\nabla$ 」なる偶因性・リスクである(18)。諸事態  $\parallel$  諸選択肢  $A_1, A_2, \dots, A_n$  のうち  $A_1$  を選ぶとき、 $A_1$  を選んで  $A_2, \dots, A_n$  という他の可能性を排除することがシステムの機能であり、排除された他の可能性が選ばれうるという可能的事態がそのシステムの環境である。このように $\nabla$ 環境 $\nabla$ 概念はあくまでも選択機能によって理解しなければならない。

フッサールは、システム/環境という用語こそ使わないものの、内/外の区別を作用内在的/超越的の区別に求めている。しかし選択することと選択されることはシステムと環境の関係にはない。意味システムにおいては、選択と選択された事態とは不可分の関係にあるからである。またまさに「環境は、システムによって、そしてシステムとの相関においてのみその統一性を得る」がゆえに、システムにとって環境は超越的ではなく、選択されなかつた事態すなわち「反対の意味は、ただ潜在的に共与されたもの、不在に現前するものとしてのみあるにす

ぎなぐ(204)。意味はイデアールにシュベチエス的単一性を持つ機能超越的な存在者ではなくて、まさに選択機能そのものである。

『論理学研究』で、フッサールは次のような全体部分関係論を展開している。まず時間空間の直観的全体が断片(Stücke)の総計として与えられ、この独立的部分に意味的契機(Momente)という非独立的部分が結び付く<sup>3)</sup>。意味はそのノエシス／ノエマ構造に基づいて、言語表現に担われるのだが、言語表現は名辞(Nama)を部分とする文(Satz)から成り立っているのだが、名辞はさらに語(Word)から成り立っていると云ってよいであろう。その際並べ方には法則がある。もし文法法則を無視したなら「アブラカタブラ」のような意味付与不可能な、つまり無意味な表現ができあがる。文法法則に従っても、論理法則を無視するなら「丸い四角」のような意味充実不可能な矛盾した表現(反意味)が生じる。論理法則を守っても、事実法則を無視するならば、「黄金の山」のような指示対象の实在しない(無対象という意味での)偽の表現が生じる、という次第である。

語を並べることによる有意味で真な命題の構成をシステム論的に考察してみよう。英語の文を作るとき、アルファベット26文字に空白1を加えた27の可能性(引用符

等他の記号については考えないことにする)の中から一つを選んでいことになる。つまり $n$ 文字分の文を作ったとき、形式的には $27^n$ の他の可能性を排除しているわけだ。さて複雑性の度合いは、エントロピーで、即ち $S = K \log_e W$ というように対数で表現される( $W$ は可能な数の総計。なお情報理論では定数 $K$ は1で、底は2である)。ウェーバーの法則によると、動物の感覚は刺激の大きさそのものよりもその対数を感じるのだが、複雑性の感覚についても同じことが言えるわけである。 $n$ 文字分の文のエントロピーは、単純に計算すれば $\log_2 27^n$ 、 $n \cdot \log_2 27$ ビットであるが、実際にはもっと小さい。アルファベットは同じ確率で使われるわけではなくて、 $e, t, a$ は使用頻度が高いし、 $z, q, x$ のそれは低い。 $n$ の後には必ず $z$ が続くという規則もある。単語の順列も同様である。情報エントロピーのビット単位は、しかし熱力学的エントロピーに約 $10^{10}$ のボルツマン定数をかけなければ釣り合いが取れないほど小さい。例えば(これは表現とその指示対象との例解ではないのだが)、1ミクロン角の計算機の記憶素子には $100$ 万ビットの情報量が記憶されるのに対して、それが持つ熱力学的エントロピーは、 $100$ 億ビットにもなるというありさまである。ここで情報Ⅱ内の主観／物質Ⅱ外的客観なる二分法を持ち出すつ

もりはないが、情報システムが環境に対して大きな複雑性の落差を持っていることは銘記すべきことである。このことは平たく言えば、情報（言語）は、その指示対象を常に大幅に単純化して represent（表現⇓代表）しているということであり、次のような地図のパラドックスで理解されえる。言うまでもなく有用な地図とは、現実の地理を精確に描写している地図でなければならぬ。しかしもし有用さ⇓精確さの極限を求めて行くなれば、理想的な地図とは現実の地理そのものであり、地図はかえって不要ということになってしまう。地図⇓情報は、現実と同じであると同時に同じであってはならない。

シュレーディングが指摘したように、生命はエントロピー増大則に逆らってネグントロピーを食べて自らの有機体的秩序を維持している。これが生命の定義となるかどうかは別としても、人間をして人間の社会という自己組織システムは、さらに情報というネグントロピーを食べて生きている。システム／環境間の複雑性の落差を帰結しているのは、このエントロピーを縮小するシステムの選択機能である。

さて選択は常に選択の地平を持つ。例えば来春卒業を控えた大学生 A 君が、就職先として、N 証券か D 証券かあるいは Y 証券か……と迷っている時、どこを選ぶにせ

よ彼は△証券会社への就職▽という地平のもとに留まっている。もちろん彼は、「証券会社よりも製造業へ行った方が路が開けるのではないか」というように、この問いの地平そのものを対自化して問うことができる。しかしこの問いもまた△会社への就職▽というより広い地平のもとに留まっている。「就職するよりも大学院に行った方が路が開けるのではないか」と問うた場合も同じことである。だが「N 証券へ行くべきか、それとも公園に散歩に行くべきか」という問いは普通生じない。選択の地平がないからである。この点で、地平とは不確定性を不確定たらしめている有意味性の制約であると言える。そして有意味性の究極的制約（地平）が「世界（⇓システムと環境）」<sup>(4)</sup>である。「意味の限界がシステムと環境との差を異のままにして初めて世界は存在しうる」<sup>(383)</sup>。

地平において、「限界を維持すること(boundary maintenance)がシステムを維持することである」<sup>(36)</sup>。このテーゼが意味するところは、システムは選択する機能として存立するということである。N 証券を選ぶことによって、我が大学生は N の社員となり、D・Y……等は環境となる。消費税導入反対／賛成、PKO 法案反対／賛成……という一連の選択肢において、左側を選択するこ

とよってその政治システムは左翼的になり、右側を選択する保守的な政治システムは環境となる。このようにシステムの限界と環境は機能的に考えられるべきであつて、空間的に考えられるべきではない。「空間の限界という分かり易いイメージは、それが限界を越えて点対点の相関を示唆するかぎりで、想像力を誤りに導く。家屋の途切れるところで庭が始まるというわけである。この場合限界はその時々で確定されたものとして表象される。他の事象との近さ若しくは遠さの関係を秩序付けている。これに対して意味の限界は、空間の限界もまた意味の限界をもちろぬ象徴できるが、複雑性の落差を秩序付ける。意味の限界はシステムと環境を異なる複雑性の可能性領域として切り離す<sup>(5)</sup>。我々は「環境」なる語で以って身体とその外部などを連想しがちである。しかし身体的な内部と外部、または自己と非自己も、遺伝子情報に基づく免疫システム<sup>(6)</sup>の選択機能による区別なのである。

ともあれルーマンのシステム論においては、機械システムや有機体システムなどのリアルなシステムは考察の外に置かれている。彼が主題に据えているのは情報システム、つまり意味を構成するシステムである。「意味を構成するシステムには社会的システムと同様に心的システムも含まれる。心的システム(誰のであらうとも!)

は、それが体験と行為の意味的連関の統一体として同定されるかぎり、意味を構成するシステムである」<sup>(7)</sup>。

では意味とは何か? 現象学が教えるように、体験は、その直接的顕在性とは別に、潜在的な未規定性の地平において自己を越えて他の可能性を指示している。この体験の自己過剰要請としての複雑性を縮減する形式(簡単に言えば、それ $\wedge$ とは $\vee$ 異なるあるものをそれと同じもの $\wedge$ として $\vee$ 述定すること *etwas anderes  $\wedge$  als  $\vee$  dassel-be zu setzen* の形式)が意味である。選択された可能性は、顕在性とは他であるがゆえに $\wedge$ 他でありうる $\vee$ という可能性であり、したがって他でありうる可能性の選択自体が $\wedge$ 他のようにも選択しうる $\vee$ という可能性である。そしてここから生じるパラドックスは、可能性を減らす機能である選択が、まさに減らすことによって減らすという可能性を増やしていること、即ち複雑性の縮減は同時に複雑性の増大であるということ、これである。

## 二 システム論における真理と権力の関係

我々はかくして、事象レヴェルにおける $\wedge$ 他のようにありうる $\vee$ ことの排除(真理)から、社会レヴェルにおける $\wedge$ 他のように排除しうる $\vee$ ことの排除(権力)の問題へと移行することになるのだが、ルーマンは、しかし

「複雑性のみが複雑性を縮減することができる」(49) というテーゼをやや別の意味で主張している。ルーマンによれば、「いかにして、複雑性の縮減を通して把握される複雑性を増大させることができるか」は「合理性の問題」(386)である。複雑な環境に適応するためには、社会システムは自らを合理化し分業化する。「部分システムは、自分の環境／システムの差異に定位し、これと共にしかし全システムがそれ自体で構成されることによっていわば全複雑性の一部分を受け持つのである。それゆえ部分システムは、全システム再生産の多くの要求がよそで満たされているという前提を通して負担の軽減を感じるができるのである」(383)。わが大学生A君は、N証券に入社することによって生活手段の確保という複雑性の縮減を行いつつ、他方N証券がどのようにして株式の売買という機能を果たしているのかを知らなくとも遂行できるような細分化された職務をこなすことによって社会システムの複雑性を増大させているのである。だが社会の分業化がもたらす秩序形成は、複雑性IIエントロピーの減少をもたらすのではないだろうか。分業化II複雑化というのはあまりにも皮相ではないだろうか。我々としては、選択が持つ不確定性をもっと強調したい。Aが証券会社N、D、Y……の中からNを選べるか

どうかは、Nが採用候補の学生A、B、C……の中からAを選べるかどうかにかかっている。選択しうることとは、その選択することが選択されうるということである。Aにとって、B、C……は、共に入社しうる場合、必ずしもライバルではないが、もし競争率が激しいのなら、彼等のgleichgültigなVerschiedenheitの関係は、Gegensatzの関係へ、さらにAとBのうち一人しか採用できない時にはWiderspruchの関係にまで先鋭化する。複雑性の増大を、このように複数の可能的機能の競合対立としてではなく、機能分化による共存としてしかみなさないことは、選択の妥当性を問題化しない先ほど指摘したルーマンのモノローギッシュな傾向に一致する。彼は「社会システムは拒否のコミュニケーションを通して矛盾を産出する」(497)と述べるに留まり、不確定性すなわち△他のようでありうることをシステム間の闘争として理解していないように思われる。

ルーマン自身は、当の闘争(選択の選択)というプロブレマティクを、パーソنزにならってdouble contingency/doppelte Kontingenzの問題として対自化する。但しこれは心的システムと社会システムの関係(Interpenetration)ではなくて、心的システム(自我)と心的システム(他我)との関係(Interaktion)である。そして、

フッサールの場合と同様、*Sozialisation* は「心的システムとそれによって制御される人間の身体の振舞とを相互浸透〔コミュニケーション〕を通して形成する過程」(326) として特徴付けられる。コミュニケーションとは、情報・伝達・理解という三つの選択の総合である(303)が、自我がどのように情報を選択してどのように伝達するか、そのことが、それを他我がどのように理解し、その情報を自我に伝達して理解されるかにかかっており、同じことが他我についても言えるとき、二重の偶発性の関係があることになる。この自我と他私の行為／体験の相互の不確定性を縮減する第三者がコミュニケーション・メディアである。体験と体験のコミュニケーション・メディアが真理であるのに対して、行為と行為のコミュニケーション・メディアは権力である。真理と権力の間にはこのような差があるのだろうか。

真理の本質は根拠であり、選択には選択の理由付けが求められる。ところがどのような理由を付けるか自体がすでに選択である。いやむしろ選択とその理由は不可分であり、違う理由で選択することは違った選択をすることである。どのような理由でどのように選択するかはそのシステムの性質を決め・個体化する。「証券会社は、スキャンダルで評判が悪く、不況で高収入が望めな

い」という理由で他の選択肢を選ぶ大学生もいれば、「N証券は我国最大の証券会社であり、絶対に倒産することはない。今のように人気がないときこそ、入社の絶好のチャンスだ」とN証券を選択する大学生もいることであろう。同じN証券を選択する場合でも、理由が「自分は経済学部出身だから」である場合と「人事課のメンバーが自分と同じ大学の出身だから」である場合とは違った選択なのである。人事課のほうも、求職者の情熱や個性で決めることもあれば出身大学で決めることもあるかもしれない。同じ出身大学という点で、求人者と求職者の選択が一致を見たとするならば、それは「縁者びいき」という発展途上国での完全に合理化されない官僚制の内部でよく見かける腐敗と同種の公私混同であって、この腐敗によって当のシステムが他のシステムとの熾烈な競争という環境において没落するならば、それは誤った選択(学生)を誤って選択すること(企業)が、誤っているがゆえにもはや選択されえない(淘汰される)ということとを意味しているのである。このように真理は、誤謬の自然淘汰を通して自己顕示する不確定的な権力秩序へと委ねられているのであり、根拠を求める愛知(哲学)の運動は、権力の前に没落する(zugrunde gehen 根拠へと至る)。

### 三 超越論的哲学としてのシステム論

我々の今の主張は、世に所謂超越論的哲学とは反対の立場であるように見える。しかし「超越論」的哲学とはある物がその自己同一性を「超越」して他なるものへと係わろうとすること、つまり不確定性を「論」じる哲学であると理解すれば、 $\nabla$ 不確定性の超越論的反映 $\nabla$ は、多くの人が考えるように形容矛盾ではない。我々は、超越論的哲学の創始者であるカントと同様に、一方において上空飛行的な独断論の合理論（つまり通俗的に理解された超越論的哲学）を拒否しつつ、他方でたんなる不確定性に甘んじる経験論的懷疑論をも拒否する。両者は同じ超越論的哲学の二つの側面に過ぎない。たんに $\nabla$ 超越論 $\nabla$ であるのではなく $\nabla$ 超越論的 $\nabla$ であるということとは、自己関係的・自己反照的の謂いである。「反—照 Reflexion」はもちろん後ろへと立ち戻ることを含意しているのだが、「反照性の、後ろへと、関係付けることは、ここでは厳密な意味で関係付ける自我への関係付けではなくて、他ではあるが等しいものへの関係付けである」<sup>(8)</sup>したがって、 $\nabla$ 不確定性の超越論的反映 $\nabla$ は、自己指示的であると同時に他者指示的である。

伝統哲学的に言えば、超越論的哲学とは、主体として

の Subjekt が主語（基体）としての Subjekt からそれとは異なる述語（現象＝客象 Objekt）へと超越することを通して客体 Objekt から超越することである。但し主体は現象から端的に超越してしまいうわけではない。主体は超越しようとすることによって誤謬を犯し、その有限性を顕にする。即ち意識主体は超越することによって超越できなくなるのだが、また超越できないがゆえに超越しようとする。この超越可能性と超越不可能性の可能性の自己反照が超越論的意識なのである。「かくして、私が現実に体験するものへの超越論的反証は、究極的に確実な明証への道としてではなく、全ての明言を問題化する方法的技術として明らかになる。今や最も未規定的な複雑性の問題として現象する世界の存在の明証をすらもである。：これでもって超越論的反映は、システム論とりわけ社会学に対して仕事を成すのであるが、システム論には及ばないし、問題提起による以外にはシステム論を「基礎付ける」ことはできない」<sup>(9)</sup>。そこで「我々は、超越論的理論をただ一つのシステム指示を誤って絶対化したものとして（しかし同時に自己指示理論にとって一つのよいモデルとして）理解する」(10) ことになる。

自己指示性（自己言及性・自己観察性）の問題そのものは、システム論の重要な主題として取り上げられる。だ



が超越論的意識を誤解するルーマンは、まさにそのことによって自らのシステム論を超越的にしてしまっているのである。

この主題と密接に関係するのが Autopoiesis の問題である。我々はシステムの自己再生産と聞くとまず有機体の生殖や新陳代謝を思い浮かべるが、意味のシステムにおける自己再生産とは何であろうか。「再生産とは、生産されたものからの生産を専ら意味する」(233)。システムは、行為ではなく行為の予期のシステムであり、予期はまさに過去にそのように予期が満たされたがゆえにそう予期されるのであり、その予期が満たされることによって新たな予期とその実現が再生産されて行くのである。それゆえ社会システムは己の縮減機能の存立根拠を自己言及的に自らの内に持つ。そして社会システムの環境たる諸個人にとっては、真理はあらかじめ縮減されたものとして体験されるだけなのである。つまり観察・観察される $\wedge$ 自己 $\nabla$ は意識ではなくて、社会システムなのである。「主観性・意識の現存・意識が根底に横たわっていることは、社会システムの自己言及としてではなく、社会システムの環境として統握される」(234)。「システムの自己記述は、システムをその環境との差異として統握しなければならないだろう」(235)。

では個人の意識には自己観察性がないのかと言えばそうではない。というのもそもそも「個人性とはこの(心的システムの)自己言及的再生産の円環的閉鎖性以外のなにもものでもありえない」(357)のだから。「この閉鎖性は、(…)反省の中で意識が自己自身を前提することとして現れる。意識は自己自身が何であるかを知ることを通して初めて、自己自身が何であるかを知る」(ibid.)。デカルトの cogito, ergo sum を想起すまでもなく、意識するということが意識の存在である、つまり、Bewußtsein とは Bewußtsein である。そして意識がどのように自己について意識することが自己意識の存在であり、そして自己意識がどのように自己意識について自己意識することが自己意識の自己参照(自己言及・自己指示・自己観察)である。伝統的な反省哲学はここで自己反省する超越論的意識を定立してきたのであるが、「経験的/超越論的という致命的な差異はまさに意識の自己再生産の単一性(統一性)を破壊しているのだ」(ibid.)。経験的な意識は経験的な意識のもとに留まるべきであり、経験的 $\parallel$ 不確定的な心的システムは己の持つ不確定性・ $\wedge$ 他の様でありうることを自己参照するべきである。意識システムが他でありうることを、このことが他の意識システムが存在することなのであり、意識システムが真

理を(体験ではなくて)構成しつつも、究極的妥当性に関して、(社会システムのではなくて)システム間の不確定権力関係に委ねられていること、このことの自己参照⇨他者参照が超越論的システム論であることになる。

註

(1) Niklas Luhmann : Soziale Systeme, suhrkamp taschenbuch wissenschaft 666, 1987, 以下この書からの引用は、本文に頁数のみを記して行う。

(2) ルーマンは、ここでアトミスティックな主張をしているわけではない。「いかなるシステムも、他のシステムを分析的に分解して、そこにおいて認識が究極の手がかりと認識の客観との確実な一致を見出すことが、できる究極的な要素(実体)に辿り着くことはできない」(61)。要素と事態の区別は相対的なものであり、したがって我々は、ある種のルーマン研究者のように「複雑的」と「複合的」とを区別しない。

72-73.

(6) ルーマンによれば、社会システムにおいて免疫システムとして役立つのは法システムである。法は可能的衝突を先取りして作られる(509-510)。

(7) Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie, S.29.

(8) Soziologische Aufklärung 1, S.99.

(9) Soziologische Aufklärung 1, S.78.

(ながい としや 一橋大学)

(3) Husserliana, Bd.19, S.272.

(4) Luhmann : Soziologische Aufklärung 1, Westdeutscher Verlag 1970, S.143.

(5) Luhmann/Habermas : Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie, Suhrkamp Verlag 1971, SS.